

博士論文要旨

論文題目 身体語彙を含む日本語の慣用句の分析：ペルシア語との対照を通して
－「目」「手」「口」「身」を用いた表現を中心に－
氏名 ファルザネ・モラデイ
学籍番号 LD091014
学位 博士（言語社会学）

本論文は日本語とペルシア語における「目」「手」「口」「身」という身体語彙を含む慣用句の意味拡張のプロセスを考察し、イラン人の日本語学習者にとってどういう意味領域の慣用句が覚えにくいかを明らかにすることを目的としたものである。各章の概要は以下の通りである。

第1章を序論とし、本稿の研究動機と研究目的、そして研究範囲とその方法や調査結果、研究対象、論文構成などの考え方を説明した。また、本稿の研究手段として用いた認知言語学の基本知識を紹介した。

第2章では、日本語とペルシア語における比喩的意味の作られ方の特徴やパターンについて論じた。その結果、いくつかのことが明らかになった。まず、ペルシア語では、日本語のメタファーと対応する2種類のメタファー（استعاره/este‘āre/メタファー・کنایه/kenāye/メタファー）が存在している。また、日本語においては、意味拡張が「形態素・語」、あるいは「句」のレベルで派生する場合、これらはメタファー、メトニミー、シネクドキーと呼ばれている。しかし、ペルシア語においては、メトニミーが日本語と同様のものであり、そして「語」の意味拡張がなされた場合であれ、それが「句」のレベルにまで派生するものであれ、「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」と呼ばれている。メタファーの場合は、ペルシア語では「形態素・語」と「句」が区別される。つまり、日本語のメタファーと対応する2種類のメタファー（استعاره/este‘āre/メタファー・کنایه/kenāye/メタファー）がペルシア語には存在しており、意味拡張が「語」に派生する場合には「استعاره/este‘āre/メタファー（استعاره مصرحه/este‘āre mosarahe・مکنیه/استعاره مکنیه/este‘āre maknīye・تبعیه/استعاره تبعیه/este‘āre tabaīye）」となり、又、意味拡張が「表現の全体」に派生する場合は「کنایه/kenāye/メタファー」となるのである。

シネクドキーに関しては、日本における言語学者の考え方が統一的ではなく、シネクドキーをメトニミーの一種と捉える言語学者もいれば、シネクドキーをメトニミーから区別し、日本語の比喩をメタファー、メトニミー、シネクドキーに分類する言語学者もいる。

本稿では日本語のシネクドキーは、ペルシア語の「علاقه عام و خاص/alāqe-ye ām-o xās →固有—公共」の関係に基づく「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」に対応すると考えている。

続いて、両言語の慣用的表現の分類とその特徴について討論した。日本語では慣用句、つまり、一般的な共通理解として、習慣的に二つ以上の語が結合した形で使われ、全体であ

る特定の意味を表すものとして定義されるものはペルシア語では、別の名前で呼ばれる。それは「前置詞+名詞+動詞」、あるいは、「具象名詞/抽象名詞+動詞」という形で作られ、前者は「عبارت فعلی/ebārat-e fe'li/動詞句」、後者は「فعل مرکب/ fe'l-e morakab /複合動詞」と呼ばれる。それぞれをレトリックの観点から考察すると、場合によっては「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」、「استعاره/ este'āre /メタファー」、「کنایه/ kenāye/メタファー」などと見なされることとなる。そのため、本稿では「مجاز مرسل/ majāz-e morsal/メトニミー」や「استعاره/ este'āre/メタファー」、そして「کنایه/ kenāye/メタファー」として確定されているものが日本語の「慣用句」と対応するということが明らかにした。

第3章では、日本語とペルシア語の「目」を含んだ慣用句の対比を行った。結果として、日本語とペルシア語には「目」の形状や位置に着目し、それに基づく意味拡張が両言語に存在している。しかし、日本語では「目」の形状や位置の類似性によるメタファーの拡張がなされる範囲は、ペルシア語のそれより広いということが明らかになった。

形状や位置の類似性による意味拡張以外に、「目」の機能の隣接性に基づいて派生した語もあり、「物を見る能力。視力」「見ること。見えること」「注意して見ること。注意」「見分ける力。洞察力」「見たときの印象。外観」はその例である。これも、日本語だけの意味拡張であり、ペルシア語には存在していない。一方、「目」から「邪視の害」「望・希望・期待」「受諾・承諾・応諾」「愛すべき・貴重・親愛」「面前・御前」「睡眠（うたた寝）の単位」への意味拡張がペルシア語特有のものであり、この点で、両言語における意味拡張は異なりを見せている。

日本語では、「目」に関する慣用表現において、メトニミーによる意味拡張がほとんどであるのに対して、ペルシア語ではメトニミーによる意味拡張が少なく、「کنایه/kenāye/メタファー」、「استعاره/este'āre/メタファー」による意味拡張が多く見られる。

第4章では、日本語の「手」とペルシア語の「دست/dast/手」の意味拡張及びその慣用句の分析を行った。両言語では「手」の形状性や「手」の位置に注目され、それに基づく意味拡張が見られる。しかし、日本語における「形状の類似性に基づいた意味拡張」はペルシア語より広いという結果があった。また、手の機能の類似性による意味拡張は、日本語とペルシア語では異なりを見せ、この場合でも、ペルシア語に対して、日本語の方がより広い傾向を示した。

次に、日本語の「手」に関する「慣用句」とそれと対応するペルシア語の「手」の慣用表現の意味拡張について討論を行った。その結果は、「目」の慣用表現と同様に、日本語では、「手」に関する慣用表現において、メトニミーによる意味拡張がほとんどであるのに対して、ペルシア語ではメトニミーによる意味拡張が少なく、「کنایه/kenāye/メタファー」、「استعاره/este'āre/メタファー」による意味拡張した範囲が広いことが明らかになった。

第5章では、日本語の「口」とペルシア語の「دهان/dahān/口」の意味とそれぞれを含む慣用句の意味拡張について言及した。両言語では、「口」の基本義はほとんど同義であるが、メタファーやメトニミーによって意味が拡張されることが分かった。

両言語ではその「言語行為」と「摂食行為」という口の主な機能に注目され、隣接性によるメトニミーに基づいて「口」から「摂食行為」及び「言語行為」へ意味が拡張された語があり、それらはとりわけ日本語に多く存在する。

また、両言語では、「口」の形状の類似性にも注目され、それに基づく意味拡張があった。しかし、日本語の「口」のいくつかの意味拡張がペルシア語には見当たらない。

「口」の慣用表現の意味拡張の分析の結果として、「摂食行為」を表す日本語の「口」は、「人」や「味覚」に拡張するのに対して、ペルシア語においては、「味覚」のみを表していた。すなわち、ペルシア語では「口」から「人」への拡張が存在しない。

そして、「言語行為」の場合、日本語では「話す能力/技術」、「話し方」、「話（の内容）」に拡張され、ペルシア語では、「話す能力/技術」、「話し方」への意味拡張が発生していた。つまり、ペルシア語では、「口を奢る」「口を出す」などのような表現、すなわち、「口」から「話そのもの・発言」へ派生した表現がないことが明らかとなった。

また、「目」と「手」の慣用表現と同様に、日本語の「口」を含む慣用句では、メトニミーによる意味拡張が多くを占めるのに対し、ペルシア語では「کنایه/kenāye/メタファー」の方が多く見られた。

第6章では、日本語とペルシア語の「身」を含んだ慣用句の対比を行った。結果として、日本語の「身」が「全身」を指すに対して、ペルシア語では、「頭」と「体」が区別されていることが分かった。また、日本語の「身」は「体」つまり、具体的な対象として捉える以外に、抽象的な対象としても捉えられることに対して、ペルシア語では、人間の体を指す「بدن/badan/身・体・肉体・身体」という言葉は日本語の「身」と大きく違い、身体的、肉体的な意味のみを表し、抽象的な観点からは捉えられない。一方ペルシア語では、「身」の肉体的な側面と抽象的な側面が区別され、それぞれが独立的に名づけられ、肉体的な側面を表す場合は「بدن/badan/身・体・肉体・身体」、そして、抽象的な側面を表す場合は「جان/jān/生命・命・魂」という言葉が使用される。両言語では基本義はほとんど同義であるが、派生義の場合は両方では、意味拡張がほとんど異なりを見せた。

最後に、日本語の「身」を含む「慣用句」とそれと対応するペルシア語の慣用表現の意味拡張について考察を行った。その結果として、まず、日本語の「身」とペルシア語の「جان/jān/生命・命・魂」は「こころ」つまり、精神的な側面と結び付けられていることが分かった。

また、「身」を含む日本語の慣用表現の中では「身分・地位」や「立場・境遇」への意味拡張はペルシア語の「بدن/badan/身・体・肉体・身体」や「جان/jān/生命・命・魂」の慣用表現では見当たらない。多くの場合は「身分・地位」や「立場・境遇」を表す「身」を含む日本語の慣用句はペルシア語では「جان/jān/生命・命・魂」ではなく「自分自身/خود」あるいは、「自分自身の状況」という語と対応することが明らかになった。

前章の「目」「手」「口」を含む慣用句では、日本語の場合はメトニミーによる意味拡張が多くを占めたのに対し、ペルシア語では「کنایه/kenāye/メタファー」の方が多く見られた。しかし、「身」を含む慣用句は、両言語では「メタファー」と「メトニミー」の使用がほと

んど同様であった。

以上、日本語とペルシア語において、「目」と「چشم/češm・čašm/目」、「口」と「دهان/dahān/口」、「手」と「دست/dast/手」、「身」と「بدن/badan/身・体・肉体・身体」「جان/jān/生命・命・魂」を含む慣用表現の分析結果を振り返った。

それぞれを含む語の拡張された範囲を比較した場合、日本語はペルシア語より広く、両言語において、意味拡張が一樣ではないと考えられる。多くの場合は日本語では派生する意味拡張がペルシア語では存在しない。一方、ペルシア語でも、日本語に存在しない意味拡張があるが、日本語に比べて多くない。

また、使用された日本語とペルシア語の「目」、「口」、「手」、「身」を含む用例のメタファーとメトニミーによる意味拡張を比較した場合、全 103 例中は、日本語は 54 例、ペルシア語は 49 例を占めていた。そして、メタファー/「کنایه/kenāye/メタファー」による意味拡張は日本語では 12 例、ペルシア語では 33 例であった。一方、メトニミー/「مجاز مرسل/majāz-e morsal/メトニミー」による意味拡張では、日本語の例は 36 例、ペルシア語は 12 例で、両言語では異なる意味拡張を示した。

このような意味拡張の異なりは日本語を第二言語として習得するペルシア語母語学習者には障害になると思われる。とりわけ、母語に存在しない意味拡張はペルシア語母語話者の日本語学習者にとって一番覚えにくいことであり、母語の特性の干渉ではないかと考えられる。